武者小路実篤の「自己の為」をめぐつて

――その青年時代に関する一考察――

遠藤　祐

武者小路実篤の名は、しばしば楽天家ないし楽天主義ということばに結びつけて考えられるようである。事実、彼自身もその文章のなかで、自分は楽天家だという。楽天的というと、一般に、生来のんびりと出来あがつた、思考の屈折などいささかもない人間の姿がおのずと浮かんでくる。武者小路についても、この評語のうちに彼への反感と冷笑のこめられる場合が少くないらしい。たしかに、「自分は境遇に自分をあはせようとは思はない、境遇を自分にあはせようとする」（『利己主義者としての自分』）という言い方など、それだけ聞かされると、誰しもふと抵抗を感ぜずにはいられないだろう。もちろん「境遇を自分にあわせようとする」という言い方の大胆さ、自信の異常な強さは、公卿華族という家柄がかつて有していた特殊性、父が早世し長上としては母と祖母達きりいなかつた家庭環境を抜きにしては考えられない。幼いときから、他人に頭を抑えられた経験をほとんど持たずに過してきたという育ち方が問題にされていいのだと思う。にもかかわらず、このことばから人生をみくびつた傲慢さや認識の甘さのみをひきだして武者小路を結論づけてしまうのは早計なのである。たとえば最近の文章で、初恋のころにふれて

僕の一生にとつては一番大きな影響を与へた事実で、僕が今日楽天家のやうに言はれてゐるのはこの涙の谷を通り越したからだとも言へ、トルストイに夢中になつたのも、この寂しさを味つたあとだからとも言へる。「友情」などにも、この事実の痕跡がのこつてゐただらうと思ふ程、僕の作には影響を与へてゐるのは事実で、若い時にこの淋しい谷を一人で歩いて、其処からはひ上つたから、僕はすてるものをすてゝ起き上つた処に、僕の楽天主義（？）は生

れたと言へる。（新潮社版全集第九巻『後書き』）

と彼は書いている。

思うに、武者小路実篤は世のいわゆる楽天家となりうる条件を十分に与えられて成長した。けれどもみずから「楽天家」と名乗るまでには一つの否定的楔機を通過せねばならなかつたのである。「この涙の谷を通り越した」とき、かなり複雑な、しかも苦しい意識上の操作がなされたに違いない。ほかのところで同じことばについて、たとえどのような逆境に立たされても、そのことが自分から生を信じる力を決定的に奪うことはない、と解されるような説明がしてあつたと記憶する。武者小路の楽天主義は、あるいは、人生の淋しさ、苦しさにたえるための不可缺な営みだつたかも知れないのである。

今日、数多くの雑感や初期の中短篇を通して彼の青年時代を注目すると、およそ楽天家というにふさわしくない周密な分析家の、ときには孤独な自己意識の姿がそこに浮びあがつてくる。彼について語りはじめる場合、やはり「すてるものをすてゝ起き上つた」経緯を見のがすことはできぬ。

*

武者小路実篤の初恋については、大正三年四月の『白樺』に掲げられた『第二の母』という短篇をとりあげる必要がある。戦後、創作集に収めるとき『初恋』と改題された作品だが、作者はここで、一個の小説を構成するというより、青春の思い出を率直に語つていると思われる。冒頭の一節からもそれはうなずけるし、「第二の母」と呼ばれる少女が実名のまゝ登場していることなども（日記『彼の青年時代』参照）仮構意識の稀薄さを示すものであろう。従つて主人公「自分」は当然作者自身と見做していい。

武者小路実篤がこの少女を初めて知つたのは十六才のときであつた。大阪から上京して、当時同じ屋敷の一遇に住んでいた彼の伯母のもとに寄寓した彼女は、それから三年後、実家へ帰るときまで、彼の身近な存在であつた。先に引いた『後書き』の一節によつてもわかるように、「お貞さん」というこの少女は、あたかも人生の入口にさしかかつていた武者小路に貴重な「痕跡」を残して立ち去つた。いま『第二の母』の表現を借りるならば、「自分にとつてこの女は自分の人生観のすべてをかへた。自分を新たなる人間として生んでくれた。鍛へてくれた」のである。「第二の母」なる呼び方もそこに由来している。

初恋をきつかけとして彼のうちで何かが大きく動いたに相違ない。だが、いつたい何がどのように変わつたのか。それをさらに追求してみなければならぬ。

初恋以前の武者小路実篤を知る手がかりとしては、『第二の母』のなかの「嘗て兄が文科に行かうとしたのを嘲笑つて法科に行かない馬鹿があるものかと思つてゐた」という一節があげられるだろう。同じ事実が自伝小説『或る男』にもやや詳しく描かれているが、それによれば、「或る日兄と散歩を

した時」、兄から文科と法科の何れを選んだらよいだろうかと相談され、自分が同等の人間として扱われたのを「名誉」に感じるとともに、心の底では「文科なんかにゆく奴があるものか、自分なら迷いはしない」と思つたという。

ここに「兄」とあるのは三才上の公共のことであろう。「或る日」とはいつごろか、明瞭ではないが、話の内容その他から推して、武者小路の十七、八のころではないかと思われる。「お貞さん」に対する気持が、単なる親近感から恋情へ移り変わろうとする時期に近い。兄の迷いとは、いうまでもなく、「人生をいかに生きねばならぬか」をみずからに問うた結果生じたものであつた。人生の真にふれたいという願い、それを「文科なんかに……」と躊躇なく否定し去る武者小路がここにいたのである。

ところで『或る男』の他の記述に従うと、当時の彼は「誰よりもすぐれた、世界第一の人間」になろうとする念願を抱いていたらしい。しかし「世界第一」の内容はおそらく当の彼自身にも明確に規定できていなかつたのではないだろうか。たゞ、それが、権力支配と結びつく傾きを割に強くもつていたことだけはたしかなようである。無条件で法科に行こうときめていた彼のうちには、権力の座について人を意志のままに動かそうとする「野心」が頭をもちあげていたと思う。

ともあれ、かなりはつきりと政治家志望であり、文学、芸術の人生における意義にはほとんど無関心だつた、というのが初恋以前の武者小路実篤であつたと想像される。幼いころから、わがままが通りやすい環境に育つた彼は、誠に自然にかつ無邪気に、兄の迷いを無視し、自己を肯定できたのである。環境はいつしか、他人は皆自分の思いどおりになるのだという考えを内心に培つていた。ところが、初恋はそのような彼を見事に「やつけた」のであつた。

恋は人を盲目にするという俗諺があるが、武者小路の場合は、むしろ眼を開かれたという方が適当かも知れない。「お貞さん」の出現は、自己についてまた他人の存在について、多くのことを彼に気づかせる動因となつたと考えられるからである。

『第二の母』は、すでに記したように、作者がその青春像を追懐した「回想断片」にほかならないのだが、そこに描かれたのは、一人の少女を知ることによつて同時に自我に目ざめていく過程であるといつていい。たとえば「自分はお貞さんを恋するやうになつてから、今迄よりも真面目に自分のことを考へた」ということばがある。愛の自覚によつて自己探究の真摯さが触発された事情をうかがうに足りるだろう。「今迄よりも真面目に」という表現のうちに、それまでの「野心」にとらわれた自己への反省、さらにいえば、底に動く無意識のエゴイズムの発見とそれへの批判、内的世界の価値の自覚をみてとることができる。全篇を通じて、あたかも、主人公が「お貞さん」を姿見としてみずからに検討を加え、その実態を明らかにしていくといつた印象が濃いのも、作者に

おける初恋の意味を物語つてくれるようである。

のみならず、かかる自己確認と「お貞さんの友達として恥かしくない立派な人間にならう」とする成長意欲とが、愛情を媒介として成立しているなら、当然そこに「他者」というものの重みについての実感があつたはずである。とともに、自己と他者とを結ぶ「愛」についての認識もより深まつたと考えられる。「お貞さん」は武者小路の眼前に現われた最初の意のままにならぬ他人であつた。しかも彼女に対する心持は、家族のものへの愛情とは同じでなかつた。それは無条件には成り立たぬ。おたがいの理解と信頼に基づく特別な結びつきであることを要求する。だから、彼女から「姉が居なくなつて誰も親身に話す人がなくなつて淋しい。貴君だけがたよりだと云ふ意味のこと」を聞かされると、非常な幸福感が訪れるのであり、「お貞さんが自分のことだけきり思つていないと云ふ証拠をつかみ」たいと心を砕くことになる。武者小路が「お貞さん」に自己と同等以上の人格を認めて、彼女を愛していたことも注意されていい。

武者小路実篤には、いま一つ、初恋の残した「痕跡」が見られるように思う。それは、愛においてどれほど身近な存在であろうとも、いつかは自分から離れていく可能性をうちに含むという認識である。

自分は初め個人主義者ではなかつた。自分は自分の道を大勢と一緒に歩く心算だつた、友達とか恋人とかは自分を守護してくれるのが当然と思つてゐた。しかし現実はこの空想を破壊してしまつた。友達とか、恋人とかは皆各自の仕事と運命とを荷つてゐた。ある処まで来た時に自分は友達や恋人に別れなければならなかつた。

明治四十四年に書かれた『個人主義者の感謝』の一節である。これは、直接には『お目出たき人』に描かれた愛の体験を反映したことばだと思われる。だが「お貞さん」と「別れねばならなかつた」事実もこれと無縁ではあり得まい。『お目出たき人』の「お鶴」を恋してからも、なお「お貞さんのことを思ふと淋しかつた」(『第二の母』) 武者小路であつてみれば、なおさらである。恋人が「各自の仕事と運命とを荷つてゐた」という発見、それは彼女が意のままにならぬ他人だとの実感につながるものだつたであろう。

自己以外の人間は、いかに深く理解しあえたとしても、所詮別の存在にほかなるまい。個々の人間はかけがえのない各自の人生を荷つていて、それを誰かに譲り渡したり、他から譲り受けたりすることはあり得ない。その意味で人間は孤独なのだ。生きるとは、だから、淋しさを含んでいるに違いない。——初恋に破れた武者小路は如上の人間観に近いものを味わつたのではなかつたか。彼は「お貞さん」との交わりの間に人生の淋しさを身にしみて感じるようになつた。しかしそれに圧倒されるとき、彼の存在自体が危機にさらされる。そこで彼女が遠のいてから、生きるために「淋しい気持を耐

へることを日課のやうにつとめ」る必要が生じた。しかも孤独に対する意志的な態度を通して、彼は「淋しい内に厳粛なものと希望を認め」るまでに成長する。

十九才の武者小路が味わつた孤独さは多分に感覚的なものであつたに違いない。けれども、そこには後年の「自分を理解するものは自分だけである。自分の仕事をするのも自分だけである。自分を愛する人も自分だけである」(『個人主義者の感謝』)という明確な自己中心主義に育つべき種が蒔かれていたのだと思う。もちろん発芽し生長するためには、他の多くの体験を必要としたけれども。

*

年代的にみて、武者小路実篤のいわゆるトルストイ主義の時代は明治三十六年から四十年辺りまで続くらしい。『或る男』や回想録のたぐいを参照すれば、初めてトルストイの書に接したのは、明治三十五年の夏、三浦半島の金田にひきこもつて「半農的生活」を送つていた叔父勘解由小路資承のもとを訪れたときであつた。しかし、「トルストイの教」が金科玉条に等しいものと考えられた時期といえば前記の約四年間を数えることができる。『彼の青年時代』に収められた明治三十九年三月二十二日の日記に、武者小路は次のように書きつけている。

吾人は常にト翁の書を読みて、感ずる如く、いたく良心に打たれて、自分の罪人なるを深く感じ、この世の不合理のことを打破する為に、一生を献ぜざるべからざる事を深く感ず。僕に取つては、ト翁の書は頭痛の書である。

『無くて叶はぬもの一つ』の一章を読んだ後に記された感想だが、トルストイが当時の彼に一つの「当為」であつた事情をよく示していると思う。何が最初に読まれたかは明らかでないが、少くとも「懺悔」以後の人生論或は文明批評の書であつたことはたしかである。『彼の青年時代』によれば、トルストイ主義の時代を通じて深く影響したのも、やはりそれらの書であつた。

日露戦争前後のわが国に、トルストイ＝ブームともいうべき時期があつたのは広く知られている。内田魯庵はそのきつかけについて『トルストイの思想の移入及び伝播』(春秋社版トルストイ全集第十三巻所収)において次の如く述べている。――明治三十三、四年ごろ魯庵がトルストイの論文を英訳で読むべく、丸善を通して取り寄せたとき、仕入係が小説の廉価版と早合点して大部を仕入れてしまつた。ところが「其頃トルストイの名は既に可成広く知られて読書界に相応の興味を以て邀へられてゐた上に、搗てて加へて丁度トルストイが教務大臣(シノッド)から破門を宣告されて世界に深甚の感動を与へ、此の極東の日本にまで俄に其名を喧伝した時であつたので」新着の英訳本はたちまち売切れ、「反覆輸入し、一年前後の間に二万部近くを頒布した。」トルストイの翻訳、研究が激増したのはそれ以後

であつたという。

ちなみに『戦争と平和』『アンナ・カレーニナ』の作者は一八七〇年代の終りに深刻な精神の危機に遭遇した。加えるに民衆の窮状とロシア正教会の腐敗を目撃したことから、『我が懺悔』のきびしい自己批判を経て、次第にキリストの愛の思想に基づく社会主義を確立し、社会制度の不合理を抉り出す方向に進んでいつた。そしてあい次ぐ国教攻撃の発言のため一九〇一年（明治三十四年）に宗務省から破門を宣告されたのである。

武者小路実篤が失恋の苦痛をかみしめつつ「真剣に」人生へ立ち向かおうとしていたのは、あたかも人々の間に「人生論者」トルストイが迎えられ、やがて『非戦論』をめぐつて幸徳秋水等を中心とする「社会主義者」トルストイの強調へ移行するころに当る。加藤直士訳の『我が懺悔』『我が宗教』などが次次と刊行されたのも同じ時期であつた。武者小路のトルストイへの開眼、その後の関心の向け方も、このような一般の風潮と無縁ではあるまい。ただ、当時トルストイに接した人々のうちで、武者小路の場合ほど内心深く影響された例はまれだつたろうと思われる。

ロマン・ロランは生涯を通じトルストイの正当な理解者であり、とくに青年時代、生への懐疑と絶望に苦しんだときその書簡に接して人生と芸術とに新たな眼を開かれた作家である。たえず病苦におびやかされながら、「白刃を脇腹に突きつけられているような残酷な現実」とサンボリズムの「幻想的な夢」の間を彷徨し、ペシミズムにつかれていた二十才の彼は、トルストイから「人生をあるがままに見、あるがままに云う」勇気の必要を教えられた（『道づれたち』）。苛酷な現実を少しもたじろがずに注視するにたえること。「世紀末」の現実遊離、生の意欲の衰弱に対して発せられたこの警告はロランを前進させ、「民衆劇」『ジャン・クリストフ』の創造を可能にした。のみならず、トルストイの書簡に引かれた「人間と人間を結ぶものはすべて善であり美である――人間を引き離すものはすべて悪であり醜である」という福音書の一節によつて、ロランは「人々相互の結合を促すやうな心持」（『芸術とはどういふものか』）を継承したのである。

武者小路実篤に侵透したのも、またこのようなリアリズムと愛の思想家トルストイであつたと思う。ただし、彼は内容よりも、むしろその説き方のはげしさに動かされたと見られるけれども。

明治四十四年から五年にかけて『白樺』誌上で行われた木下杢太郎との論争の一環をなす『「自己の為」及び其他について』という感想がある。そのなかで「トルストイの教は私に理性の価値を教へました。私はトルストイによつて自己の理性の権威と云ふものを知つたのでした」と武者小路は記している。自然の欲求のままに行動して怪しまなかつた彼は、トルストイを知るに及んで「理性」の重要さを指摘された。いいかえるなら、客観的な観察と判断の働きがいかに大切で

あるかを悟つたのである。同じ事情に関しては「ドストエフスキーでも、マーテルリンクでも、ストリンドベルヒでも、自分の都合よくものを見る癖をトルストイのやうに打ちくだく力はない」(『トルストイの力』)とも述べられている。「都合よく物を見る癖」は、先にふれたように、環境からくる無意識のエゴイズムの所産にほかなるまい。

すでに初恋によつて反省の対象としてとりあげられていたこの自己肯定は、トルストイにふれてむしろ許しがたい悪と見なされるに至るものの如くである。「あるがままに」自己をみた武者小路は、結果として、それを完全に否定し去る必要を痛感した。「理性」の「価値」と「権威」の発見が彼の本性の自然さを殺そうとした時期。トルストイ主義の時代とはそのような時期であつたとも見られよう。

その時分私は「自己」と云ふものを軽蔑してゐました。所謂利己主義と同じものと心得て居ました。かくて私は「利己的」な行為を皆罪悪のやうに思ふやうになりました。私は犠牲程美しいものはないやうに思つてをりました。

『「自己の為」及び其他について』の一節である。そこには、世俗の功利性に敏感にさせられた若い魂と、トルストイの豊富な説得力とがあいまつて、必要以上に自己肯定を醜いものと感じさせたきらいもなくはなかつたと思う。もちろん政治家たろうとする欲望は否定されるべき性質のものだつたかも知れぬ。だが、自我の拡大成長の意欲は、いかなる場合にも、古い秩序に対する抵抗の原動力として、積極的な評価を一度は受けてよいはずである。無理もないことだろうが、十九才の武者小路実篤の潔癖さは、「利己的」な自己の否定に、あまりに急であり過ぎはしなかつたか。そのことに、彼はトルストイ主義から脱け出る道すじで気づいたのだ。『「自己の為」云々』も実はその後に書かれている。だから同じ文章には「自己」の解釈が浅薄であつたという反省や、「自己の力」の正当な価値づけにかけるというトルストイ批判が表明されてもいるわけだが、その点については後に考えたい。

ともかく、武者小路はトルストイによつて、生活態度の「まちがつてゐることを心から感じ」、自分が安楽に暮らせるのは「まちがつた社会制度の御蔭で」あることを見出した。(『トルストイについて』)たとえば明治四十一年になつてもなお日記に次のような文章を見出すことができる。

金なき人、自由なき人を思ふ度に、自分は自分の余りに呑気なことを憎む。

……

自分は食ふ為に自己の嫌ひな事をする人を憐れむ。かかる人を助ける為に、自分の一生を捧げなければならないと思ふ。

しかしそれは旧き家を修繕する事でなく、新しき家を建てる事だと思ふ。(五月二十三日)

最後の一文はやゝあいまいだが、社会秩序の不合理を是正することに関する心持を述べたものであろう。

もちろんかかる社会的関心の目ざめは何ほどの現実との対決を伴っているとも思われない。トルストイのひき出した「理性」は畢竟自己に働きかけたに過ぎぬ。「食ふに困らぬ」自分のうしろめたさ――「食ふ為に自己の嫌ひな事」を余儀なくさせられる人々に対して済まないという感じが武者小路に社会変革の必要を思わせたのである。トルストイの影響の一つの焦点は、どこまでも「今迄のやうな生活を呑気にしてゆけない丈けの力は受けます。そしてどうにかしなければならない、と云ふことを心の底から感じます」(『トルストイの力』)というところにあり、そのため自己肯定が「罪悪」視されねばならなかったことにおかれるべきであろう。生活を「どうにか」するため、彼はまず禁欲を実行した。大学へ通うのに往復徒歩にするとか、寒中に火を用いないとか、肉食を止めるとかいう武者小路の姿にトルストイアンの面影があつたわけである。

ところで、明治三十九年の日記で武者小路実篤は「僕は、ト翁やカアライルの云ふ宗教家にならう」(六月十五日)と語つている。かかる限定づきの「宗教家」とは何を意味するのか。トルストイは、『芸術とはどういふものか』のなかで宗教制度上の意識と宗教意識とを厳密に区別したうえで、いう。

各の定まつた歴史時代には、又各の人間社会には、その社会の人々がやつとそこまで達した最高の人生観があつてその社会の向つて行く最高善を規定してゐる。その人生観が或る時代或る社会の宗教意識である。

トルストイのいう宗教は偏狭さを持たない。教会とか寺社の枠にはめこまれぬ、広い人間生活にかかわるものであつた。彼は当代の「宗教意識」を「全人類の同胞的生活、我々相互の友愛的結合」をめざす人生観にみる。このような結合を導く原理とは、ほかならぬキリストの実践した隣人愛であり、それを押しひろめるものが「ト翁」の云ふ「宗教家」なのである。武者小路の決意もまたここにあつたのであろう。「お貞さん」が去つて対象をなくしていた愛情は、トルストイに刺戟されて貧しい人々の上に注がれるようになり、より抽象的にだが人類愛に変貌した。その間の事情を彼は「恋愛によつて呼びさまされて、満すことの出来なかつた真剣な愛が、人類愛に浄化されることを望んでゐたのだ」(『生涯を顧みて人生を語る』)と回想している。前述の社会的関心も愛の成長と関係があつたと思う。雑誌『直言』の読後感に「憐れな人を救ふ平和的手段はないものだらうか」(明治三十九年三月二十一日の日記)という、その「平和的手段」が同じ人の子としての友愛に見出されたとしても不自然ではなかつたであろう。それから二年後にも、彼は心に苦しみをもつ人

人を慰める「行の人」になりたいと語つている。トルストイ侵透の一面をそこに探ることができると考える所以である。

*

明治四〇年四月十四日、武者小路実篤、志賀直哉、正親町公和、木下利玄の四人による「十四日会」の第一回会合が志賀の家で開かれた。この会は志賀日記に「例の文学読み合はせ会」とあり、「書いて集まる約束をする」とも記されているとおり、四人が自作を持ち寄つて、たがいに鑑賞批評しあう、一種の文学サークルというべきものであつた。ここに『白樺』創刊へ通じる道が開かれたと見るべきであろうが、武者小路についていえば、これはトルストイ脱却の一証左としても興味深い。由来、創作の営みは、作品の母胎である作者の自我に何等かの形で確信がおかれなければ成立し得ぬと思う。ところが、トルストイ主義者武者小路は自我の要求をすべて「罪悪」と考え、「犠牲程美しいものはないやうに思つて」いたのである。倫理感でみずからをしばつていた彼に作家になろうとする気持の起るはずはなく、行動の人でありたい願いがしきりであつたのも当然だつた。だから、「十四日会」の創設、創作活動の開始は特別の意味合いをもつて眺められるのである。

創作への試みはすでに前年の夏、第二の恋愛の直後になされていた。やゝ間をおいて四十年の初頭に『二人』が書かれやがて「十四日会」へとつながつている。第一作と第二作の間に『お目出たき人』の「お鶴」が武者小路の生活に登場する。トルストイアンから創作家への転身と再度の恋愛の芽生え、そこに何かの因果関係があるのだろうか。

『第二の母』の記述によれば、「お貞さんと別れて三年目の春、自分は恐ろしい、淋しさにおそはれた、居ても立つても淋しい」「しかしその淋しさは自分の家に居た十四才の小間使によつていくらかまぎらされた」という。最初の失恋の苦痛はたしかにトルストイによつてかなり忘れられはした。しかしそのすべてが忘れられたわけではなかつたのである。人生を真剣に生きること、その点では武者小路も充実感を失わなかつたに相違ない。が、トルストイの思想も、ついに、感覚の穴まで埋めつくすことはできなかつた。彼は孤独で立つときの「淋しさ」を理念に転化する努力で、穴をせばめようとしたわけだが、にもかかわらず淋しさは彼をときおり苦しめていたのである。

愛するものの不在がもたらす空虚な感覚は、ふたたび愛人を得たときもつともよく満される。さもなければじつとたえるよりほかに道はない。そのとき人は思いを自己に集中することになろう。見様によつては、トルストイ心酔が武者小路を「孤独地獄」から救つたといえるのかも知れぬ。あるいは逆に、トルストイの「理性」がたえず個人的な問題意識にとらわれるのを抑えていたのかも知れぬ。しかし、何れにせよ初恋以来自己に立ち帰る可能性は彼のうちにはらまれていたと考えられよう。いかに対処しようと消すことのできなかつたこの感覚上の事実が徐々に力をまし、ついに「理性」では

どうにもならなくなつたとき、武者小路は本性の命ずるままに行動するしかなかつた。それが「十四才の小間使」まきへの、つづいて「お鶴」への恋の生まれる所以であつたように思う。

さらに気づくのは、二人の少女への新たな関心にはかなり官能の色が濃いということである。『彼の青年時代』には、まきへの愛と並行して性欲に悩む武者小路の告白がみられるし、『お目出たき人』を読めば「女の柔かき円味ある身体。優しき心。なまめかしき香。人の心をとかす心。あゝ女と舞踏がしたい、全身全心を以て」というような一節にぶつかる。トルストイは彼に禁欲の生活を課したわけだが、いつまでも若い肉体をそこに閉じこめておくこと自体無理があつたのであり、その辺りにもトルストイを離れる機縁があつたとみていい。肉体の解放もまた、本性の自然につくための重要なバネであつた。

かくして、トルストイから少しでも身を外して自我の発動を許容しうる体制が作られたのち、始めて創作への意欲も動き得たといわねばなるまい。

武者小路実篤の第二の転機に当つて、メーテルリンクの『知恵と運命』が果した役割は大きい。畢竟すれば、それは、自我回復の衝動に理論的根拠を与えたといつていいのである。前記『「自己の為」及び其他について』の語るところに従えば、『知恵と運命』の「自己の如く隣人を愛すると云つたつて第一自己を愛することを知らなければ始まらない。又自己の如く隣人を愛するのでは未だたらぬ。他人の内の自己を愛するのでなければ」の一文を見出したとき、天の啓示を得たような気がしたという。トルストイとはおよそ対蹠的なこのことばが、自己棄却と隣人愛とに疑問を抱き始めていた武者小路に「天啓」の如く響いたとは、まさに実感であつたろう。とかく継子扱いをされ勝ちだつた本性はここに公然と物をいうだけの保障を与えられたわけである。

ところで、メーテルリンクから与えられた命題は何であつたのか。また『「自己の為」云々』を参照すれば、第一に、自己の能力でできる範囲の仕事をなすべきであること、第二に、それ故多くをなすためには何よりも先に自分の力を伸ばす必要があるということ、第三に、自己の実態を把握せねばならないが、自己とは容易に「深さのわからない代物だと云ふこと」などが数えられる。かつては性急に退けた「自己の為」の、あらゆる夾雑物を除いた本来の意義を、武者小路はメーテルリンクの啓示によつて十分に評価できたのであつた。しかも問題はそれにとどまらぬ。先の引用にみえる「他人の内の自己を愛する」という一句を得たことこそ、メーテルリンクの及ぼした最大の影響であつたのだ。

「他人の内の自己を愛する」とはいささか解し難い文句だが、それを解き明かすものとして、明治四十四年十二月の『白樺』に発表された『手紙四つ』のうちの「その四」をとりあげてみたい。

武者小路実篤がこの文章をなした動機は、後期印象派の画家達の絵に接して非常な興奮を覚えたことにあつた。彼は心の響きをそのまま伝えるように書いている。「最近の芸術は自分の心を赤裸々に紙の上にぶちあけるものゝやうな気がする。さうして自分と抱きあふ心のくるのを待つてゐるやうな気がする」と。そのように感じる彼の心は、セザンヌ、ゴッホ、ゴーガン、マチスの作品に対したとき、一気に作者の心ととけ合い「深い力と法悦を感ずる」。しかもそこに「批評する余地」はないのである。他者の卒直な、精一ぱいの自己表現が、ただちに自身を感動させ、生きる喜びをもたらすところに武者小路は「他人の内の自己」との邂逅を感じた。それは、ことばを換えれば、理性の思惟作用を超えた人格と人格との直接のふれ合い、直感による自我の共鳴とでもいうべきものであろう。のみならず、観るものから創るものの側へと身をおき換えた場合、彼自身「自分の心をぶちあけたものが書きたい、さうして自分の心とぴつたりあつてをどつてくれる心を探したい」（『手紙四つ』）と痛切に思い、「自分の思ふこと感じることを発表することが他人に何か新らしいもの、美しいもの、力あるもの、気持よきもの、その人が思つたり、感じたりしてもらひたく思つてゐるものを与へることが出来ればいゝ」（『自分の立場』）と心から願うのである。

自己を誠実に生かす営みが単におのれのためばかりでなく他者の人生にも役立ちうるとするなら、これほど武者小路にとつて感謝すべきことはなかつたに違いない。彼はメーテルリンクに示された新しい生き方をまず『お目出たき人』の恋愛において実地に確かめようとした。それは、『お目出たき人』の

自分はたゞ鶴の心と自分の心とはもう三四年前から他人ではないと云ふことを信じてゐる。しかし勝手に信じてゐるのだ。二三年前からマーテルリンクを愛読するやうになつてからなほさう云ふやうに思へるやうになつた。

との一節において明らかである。「自分の心とぴつたりあつてをどつてくれる心」を、彼は「お鶴」に期待したわけである。彼は、自我と「お鶴」との何れかを選ばねばならぬような羽目に立たされたら、やはり自我をとるであろう。けれども、彼女となら個性をまげずに愛しあえるという確信に導びかれて、愛はます〳〵深まつていつた。そして「自我を発展させる為にも鶴を要求する」と記されるような積極的な態度をさえみせている。「お貞さん」の存在が武者小路のあり方を規制し、ひたすら自身が責められた初恋の場合とは大きく隔たつていることが気づかれるであろう。

恋愛と並行して、武者小路実篤はやはりトルストイアンだつた徳富蘆花に近づいたり、雑誌発行の計画に熱中して「トルストイ主義にかぶれた思想で世間と戦ひたい」（『白樺を出す迄』）と考えたりしている。なおトルストイは彼の生活に

かなりの比重を占めていたことがわかる。しかし、思うに「お鶴」への関心の深まりに比例して、「他人本位」は少しずつ「自己の為」に切り替えられていつたのであろう。明治四十一年の前半辺りになると、武者小路の内心の劇も相当深刻な相貌を呈している。その一端を同年の日記にうかがつてみよう。

自分は此頃悲惨な境遇にゐる人の事を思はなくなつた。悲惨な境遇にゐる人を、なるべく見ない様にしてゐる。

自分は憐れなる人間を助けるだけの力があるだらうか。あるならば憐れな人間の事を思はない様にする事はいゝ事だらうか。

悪い事である。いゝ事では断じてない。

汝は此頃たゞ自己の事のみ考へてゐる。さうして安逸を望んでゐる。（四月二十九日）

昨日の自分も今朝の自分も、自分だが元気がまるでちがふ。今朝の自分には、自分は何者にもなれない様な気がする。その代り一生を平和に暮せる様な気がする。しかしかゝる生活をする時は世の悲惨なる方面を、見ない様にしなければ駄目だ。

どうしても自分は今の世に満足して、楽しく一生を送る事の出来ない男だ。（五月三十日）

武者小路は「経験のない、食ふに困らぬ」人間であつた。世のいわゆる生活苦という現実に直面したことは皆無といつていい。ところが、彼は他人の苦悩や悲しみを自分のものとして実感できるほど鋭い感受性にも恵まれていたから、「世の悲惨なる方面」についても、感覚のうえでは十分にわかつていたと思う。自我回復の途上において、貧しい人達への同情を切り捨ねばならぬことは、やはり、生身を裂くに等しい苦痛であつたのだ。また、ときには他人の苦しみを気にする余り、自分の方がその重みに堪えられなくなる折もあつたのである。

そのような武者小路が『お目出たき人』において、「自分を他人の為に少しでも犠牲にすることを喜ばない自分は、他人を自分の為に少しでも犠牲にすることを恥とする。ましてや、愛する故を以て愛するものゝ自由を束縛し意志を束縛するものを心から憎む自分は極端にまで自分の為に恋人を不幸にさせたくない」という徹底した個人主義に立つまでには、メーテルリンクの力もさることながら、いま一つの契機が働いている。明治四十一年四月に刊行された武者小路の最初の単行本『荒野』は、世間から無経験な「お坊ちやん」がむきになつても始まらぬと軽くあしらわれた。そのことはかなりの打撃であつたが、半面では「食ふことに困らぬ」人間は人生を論ずる資格がないのかという反問を、彼は抑え難かつたのである。「経験をいくらしようが、後ろにかくれてゐるものを知らうとしない人には、その経験は何等の知識も与へな

い」と彼は考える。――生活の事実を数多く知つたら、それで人生がわかるというのか。そうではない。人生の意味について深く考えるものこそ、本当に人生を知ることができるのだ。食うに困るとか困らぬとかは問題ではない……世評に対するこのような身構えはさらにクリンゲルの発見によつて一層強固なものとなつた。世の『荒野』評もリアリズムの稀薄さだけはたしかについていたのだが、すでにトルストイ主義が「重荷」になりかけていた武者小路は、これを機会にかえつて「他人本位」の一切を洗い落してしまつたのである。

『荒野』刊行の半年後には『クリンゲルの「貧窮」を見て』が書かれている。そこで武者小路は、「現代の奴隷なる労働者」は「一個の器械」であつて「個性ある人間ではない。」それ故自分は彼等を「憐れむ」ことはできても「尊敬すること」はできぬと述べている。この感想については、明治四十四年五月『白樺』へ発表の際、「三年前に、ある不平があつて書いたもの」と註が附されたが、全文にわたつて、たしかに筆者の気負いというものが感じられる。それは「個性の尊厳」に強いアクセントをおこうとする態度と密接なかかわりを持つていたのではないだろうか。そうして、おそらくここからは前記の明瞭な個人主義への道のりもさほど遠くはなかつたと思う。

＊

ふたたびいおう、武者小路実篤は決して安気な「楽天家」などではなかつたと。一見手放しの如くみえる「自己の為」は、いままでに述べたような複雑な道すじを経て、到達されたものにほかならぬ。若き日の武者小路についての認識を改めたうえで、私に残された課題は、彼の自己中心主義そのものの分析にあると思うが、それについては他日を期したい。

――一九五七・三・二九――

（五二頁下段より）

しての歴史的・文学史的位置が、彼の理論に種々の韜晦と屈折とを齎らした原因的状況の一端も、説明されることと思う。

またここでは看過した形になつたが、文学の主体である創作の面からでなく、評論の世界から近代化への礎石が投ぜられたという事情についても、それなりの理由が考慮されねばなるまい。

かくして逍遙の写実主義は、主張自体の矛盾や錯綜にも拘らず、近代文学の先駆と見做しうるであろうし、それらを規定する一測鉛として存在する量感をもつものということができよう。